

ドームの街 91人原爆死

旧猿楽町「空白」52年ぶり掘り起こす

往時の写真も発見

原爆ドームを残して消えた街、「広島市猿楽(さるがく)町」の住民の詳しい被災、生存状況が二十二日までに、ゆかりの人たちの手で五十二年ぶりに掘り起こされた。一九四五年末までに確認された原爆による死者は九十一人で、うち七十六人が爆死していた。一方、生存者は世帯数で四十五、八十六人が健在なことが分かり、被災前の街並みを取めた貴重な写真も見つかった。

猿楽町は百万都市・広島 の中心部、現在の中区大手町一丁目と紙屋町二丁目に当たる。死没した住民の多くは世帯主、またはその妻、学童疎開年齢に達していない

遺族の大半は、学徒動員先などで被爆しながら助かったり、当時は市郊外の安佐南区などの疎開先から入市被爆した人たち。最高齢は百歳、最年少は父親が爆死した年末に生まれた五十

手て街を復元し、犠牲者の追悼しよう」と、現在もドームそばに住むたばこ店経営伊勢栄一さん(五十八)が呼び掛け、中国新聞社が今春から、生存遺族を確認し、その協力を得て記録や証言を集めた。「空白」だった被災状況が判明するにつれて、市編さんの記録集などにもない被災前の街並みを伝える貴重な写真が、遺族宅で保存されていることも分かった。

元住民たちは、城下町として誕生した街の由来も込めて「矢倉会」(益本嘉六会長)の名称で、八月二日にドーム東の西向寺で慰霊法要を営み、今後の取り組みについて話し合う。

伊勢さん「あの日以来、つながりが途絶えた人たち

「矢倉会」連絡先は伊勢 さん宅 082(247)5324。



②電車通りから見た猿楽町の西端。運動具店、写真館、旅館(手前から)が並び、正面はドームの前身、広島県産業奨励館(1940年撮影。香川昇さん提供)③ドーム東端から望んだ猿楽町(左側)と細工町の街筋。戦前から舗装され、商家が軒を連ねた。爆心地は右側約60m(撮影時不明。日比由夫さん提供)

14・15面に特集